

「ブライダル・パラダイム」について

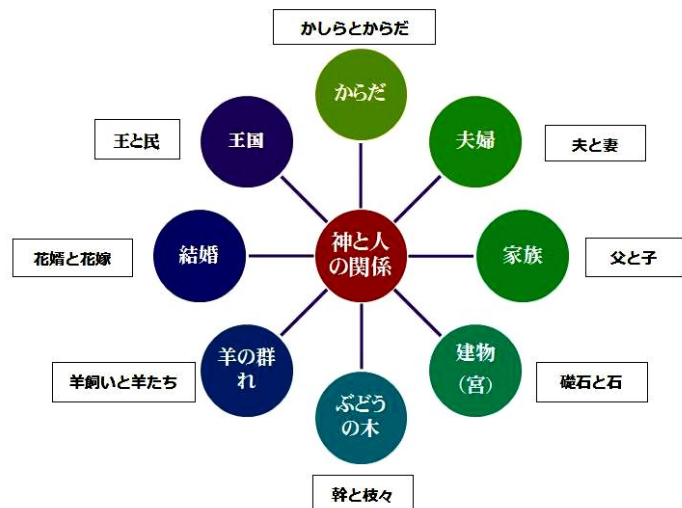
—霊性の回復において、果たしてどんな霊性を回復するのか—

ベレーシート

●「ブライダル・パラダイム」(Bridal Paradigm)ということばの意味は、キリストと教会とのかかわりを「花婿と花嫁」という視点で見える見方のことです。キリストと教会のかかわりが、聖書においては以下のようにいろいろな比喩で表現されています。

●右の図に共通していることは何でしょうか。

「かしらとからだ」「夫と妻」「父と子(子どもたち)」「礎石と石」「幹と枝々」「羊飼いとその群れ」「花婿と花嫁」「王と民」のかかわりに共通していることは、「一致する」ことによって成り立つ関係ということです。これらは神と神の民イスラエルの関係、およびキリストと教会の関係を表わしている比喩です。中でも、「**花婿と花嫁**」の比喩は神のご計画を常に意識しながら歩む上で、きわめて**夢のある終末的・未来志向をもった比喩**と言えます。婚約は成立していますが、まだ結婚していない状態です。しかし将来、必ず結婚することが定められているのです。花嫁は花婿を待つ「待ちの状態」に置かれていますが、「すでに、いまだ」の緊張感が実は重要なのです。



●「ブライダル・パラダイム」という用語自体、日本ではあまり使われていませんが、教会を「キリストの花嫁」として理解することは、今日のキリスト教会において最も欠落、もしくは、希薄化しているところでは、ないのでしょうか。それには理由があります。この「ブライダル・パラダイム」は、神のご計画の全体像と「御国の福音」、「永遠の都エルサレム」の理解と深くつながっており、もし終末についての正しい知識がなければ、また、神のご計画の究極的なヴィジョンの完成を描くことがなければ、この「キリストの花嫁」ということばは容易に使うことのできない概念なのです。

●「キリストの花嫁」という「ブライダル・パラダイム」に秘められた啓示は、神とのかかわりにおいて、「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして主なる神(花婿)を愛する」という神の第一戒を回復させる力となるばかりか、今日のキリスト教会の閉塞感を打ち破り、大きな変革をもたらす鍵となって、本来のいのちの回復をもたらすと信じます。

1. 教会の今日的課題は「ブライダル・パラダイムへの転換」

●「ブライダル・パラダイム」における**花嫁の霊性**は、奉仕とか働きとかいうよりも、神を知ること、神を愛することを喜びとし、そのことを何よりも大切にすることです。つまり、「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして主なる神を愛する」という第一戒に生きる世界です。それは主のために仕えることを第一義とするマルタではなく、主の前にすわって主の語られることばを聞くという**マリヤの霊性**です。あるいは、「私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。」と歌った**ダビデの霊性**です。さらには、**祭司の霊性**ともかかわりがあります。

●ダビデの霊性とマリヤの霊性はこれまで何度も触れてきましたので、ここで**祭司の霊性**について説明したいと思います。なぜなら、この霊性について教会で語られることが少ないのではと思うからです。祭司の第一義的な務めは、神と顔と顔を合わせて主を知り、主と親しく交わることです。エデンの園においては、その務めが「地を耕し、そこを守る」と表現されています(創世記 2:15)。神のかたちとして造られた人間の務めは、後に「王である祭司」「祭司の王国」というフレーズで表わされるように、「地を支配すること」と「地を耕すこと」です。王として地を支配する力は、祭司として地を耕すという務めを疎かにするときに喪失します。それはダビデとソロモンの治世を見るとよく理解することができます。ダビデは完全な人間ではありませんでしたが、王である前に祭司としての務めを最も重要視した人です。詩篇 27 篇 4 節の「私は一つのことを主に願った」ということばにそのことがよく表わされています。ところが、ソロモンは王として治める力を求め、それを与えられましたが、彼はダビデのように「主を求める」祭司としての務めを自ら求めることにおいては脆弱でした。王としての賜物は与えられていましたが、ダビデのような「主を尋ね求める」霊性が見られませんでした。そのことを父ダビデは見抜いていたのかどうか分かりませんが、後継者となるソロモンへの遺言として、次のように語っていたのです。

【新改訳改訂第3版】I 歴代誌 28 章 9 節

わが子ソロモンよ。今あなたはあなたの父の神を知りなさい。全き心と喜ばしい心持ちをもって神に仕えなさい。【主】はすべての心を探り、すべての思いの向かうところを読み取られるからである。もし、あなたが神を求めるなら、神はあなたにご自分を現される。もし、あなたが神を離れるなら、神はあなたをとこしえまでも退けられる。

●父ダビデは子ソロモンに、(1)「神を知ること」(「ヤーダ」**יָדָעַ**)、(2)「神に仕えること」(「アーヴアド」**אָבָד**)、(3)「神を求めること」(「ダーラシュ」**דָּרַשׁ**)を命じています。これら三つはすべて**祭司的務め**です。ダビデは、王としての務めの前にこれらの祭司的務めが大切であることを、ソロモンに遺言として語ったのでした。しかし、ソロモンがこの父ダビデの言葉を受け止めることなく、政治的取引(政略結婚等)によって平和を保持しようとしたことから、やがてイスラエルの国は二つに裂かれ、さらには亡国という憂き目を見ることになりました。

●「王であり、かつ、祭司としての務め」を果たした最初の人のはアダムですが、モーセもその一人です。彼は神の民の指導者である前に祭司でした。【主】は、人が自分の友と語るように、顔と顔を合わせてモーセに語る

れた。」(出エジプト 33:11)とあります。彼は 40 日間も主の山で過ごした人です。そして神の教え(トーラー)が彼を通して与えられたのです。それゆえモーセには神の權威と神の力が賦与されていました。神の民イスラエルが主を礼拝するために「幕屋」が建造されましたが、そこで「祭司としての務め」を任じられたのはレビ族です。ヤコブの子どもたちの中で「レビ」は三番目の子です。「レビ」という名は、母レアが「今度こそ、夫は私に結びつくだろう。」と言ってつけた名前です。ネーム・セオロジーの視点から見ると、「レビ」(「レーヴィー」^{לֵוִי})という名前には「神と結びつく」「神と一体となる」という意味が隠されています。祭司たちはこのレビの系譜にある者たちであり、実はモーセもその系譜の中にいた人です。レビ族はこの務めのために、他の部族とは異なる務めがゆだねられていました。従って、目に見える土地という嗣業は彼らには与えられていません。むしろ彼らの嗣業は、神ご自身なのです。そこには神とのかかわりにおいてきわめて重要な、永遠の務めとしての「型」があるのです。

●教会は「祭司としての務め」を回復することによって、はじめて「王としての務め」を完成させることができるのです。その逆ではありません。神のみこころになかった「祭司の務め」があるところに、神の代理者として「治める」という「王としての務め」が成り立つのです。「王の務め」の特権は単に人(民)を支配するということではありません。神の秘密(奥義)を知り、それによって、神の支配を完成させる務めなのです。「祭司の王国」、「王である祭司」という表現は、祭司の靈性と密接な関係があるのです。

●「ダビデの靈性」も、「マリヤの靈性」も、「祭司の靈性」も、そして「花嫁の靈性」も、実はみなひとつにつながっています。これらは本来、聖書の中に啓示されていたものです。ですから、靈性の「回復」なのです。以前に存在しなかったものを「回復する」とは言いません。それらをより強く意識するために、教会の今日的課題を「ブライダル・パラダイムへの転換」ということばで表わしたいと思います。「キリストのからだなる教会」の概念も、この「花嫁なる教会」の概念の中に括られてしまうからです。



2. 教会がキリストの花嫁となることは神の永遠のご計画

●教会がキリストの花嫁とされたのは神の永遠のご計画によるものであることをお話ししたいと思います。使徒パウロは、コリント人への手紙第二 11 章 2 節で、「私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにした」と述べています。ここで使徒パウロはコリントの教会の人々に、「私はキリストの福音を伝えてあなたがたをキリスト教に改宗させようとした」とは述べていません。「あなたがたを清純な処女(単数)として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにした。」と述べています。なぜなら、これが神の永遠のご計画において重要な事柄だからです。つまり、あなたがた(教会)がひとりの人の花嫁であるようにされたのは、この世界の基の置かれる前から神(御父)が、御子のために、すでにご計画していたことなのだという事です。これはパウロが考えたことではなく、神がご自身の子である方(イエシュア)に花嫁を与えるというご計画がすでにあっただけのことなのです。

●創世記2章に記されているように、神である主はエデンの園に、主の形造った人を置かれました。「エデン」(「エーデン」 אֵדֶן)とは、とても贅沢な、良い食べ物がたくさんあって、それを思いのまま食べてよい所です。また、いのちの水の源泉である川が四方に流れている所で、それは天にある神の御座から流れてくるいのちの川です。そこには永遠の喜びと楽しみがあるところ、それが「エデンの園」という意味です。そこに「人」が置かれたのです。「人」は神が造られた被造物(野の獣や空の鳥)のすべてに名をつけるという立場にいました。「名をつける」ということは、それらを支配する力が与えられていたということです。ところが、何か足りませんでした。何か大切なものが欠如していました。それはその「人」がひとりであったということです。この「人」(「アダム」 אָדָם)に対して神はこう言われました。「人が、ひとりであるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう」と。そして彼に深い眠りを与え、その眠っている間に、彼のあばら骨で一人の女を造り上げたのです。この出来事は実は天のご計画の写しなのです。男と女(妻)が結び合って一体となるという奥義はそもそも、天にある神のご計画に秘められた出来事だったので。「それゆえ、人はその父と母を離れ、妻と結ばれ、ふたりは一心同体となる。この奥義は偉大です。」とパウロも言っています(エペソ5:31~32)。

3. 花嫁の霊性の特徴

●花嫁の霊性の特徴は、何よりも神を知ること、神を愛することを喜びとし、そのことを何よりも大切にすることですが、その目標とするところは、「顔と顔を合わせて」(Face to face/「パーニーム・エル・パーニーム」 פָּנֵי אֵל לְפָנֵי אֵל)と神と過ごすことです。この向き合いの源泉は、御父と御子にあります。ヨハネはその福音書の冒頭に、「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった」と記していますが、「ことばは神とともにあった」という「ともに」とは、ギリシア語で「プロス」(προς)という前置詞が用いられています。その前置詞が意味することは、2本のマイクが並んで立っているというような「ともに」ではなく、「向き合った形で共にいる」ということです。御父と御子とは永遠に顔と顔とが向き合っている存在なのです。

●御父と御子とのかかわりは、人間の創造においても現わされることとなります。神は、最初の人アダムを造られたときに人の鼻から息を吹き入れています。そのときにも顔と顔とが向き合っています。そのかかわりの中で人が神のかたちに似せて造られたのですから、神と人との本来の姿が「顔と顔を合わせた」かかわりであったというのは当然のことです。そしてその後、「人がひとりであるのは良くない」と神である主は、人を眠らせて、その人のあばら骨をとって彼に「ふさわしい助け手」(「エーゼル・ケネグドー」 עֵזֶר כְּנֶגְדּוֹ)を造られました。眠りから覚めた人は「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女(「イッシャー」 אִשָּׁה)と名づけよう。これは男(「イーシュ」 אִישׁ)から取られたのだから。」と言って喜びと感動を表わしました(創世記2:23)。「それゆえ男は・・妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。」(同、2:24)。使徒パウロはこの「アダムとエバのかかわり」を、「キリストと教会」(花婿と花嫁)のかかわりの型だと解釈し(エペソ5:31~32)、これを「奥義」だと言っています。つまり、天と地、御父と御子、神と人、花婿なるキリストと花嫁なる教会のかかわりは、神のご計画(ヴィジョン)における「奥義」なのです。

●人が罪を犯したあとに、「人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した」(創世記3:8)

とあります。「主の御顔を避ける」という表現は、神と人との本来あるべきかわりが壊れたことを意味します。ですから、神の救いの究極は神と人が「顔と顔を合わせる」ことの回復にあることは言うまでもありません。ヨハネの黙示録ではその救いの究極を「**神の御顔を仰ぎ見る**」(22:4)と表現しています。キリストの花嫁の究極の喜びは、花婿といつの日か「顔と顔を合わせて見る」ということです。では、現在は「顔と顔を合わせて見る」ことはできないのでしょうか。いいえ、完全ではなくても、「ぼんやり」と見ることはできるのです。「一部分」を知ることができるのです。とすれば、ぼんやりではあっても、花婿の顔を慕い求めようとするのは自然です。主の隠された秘密の一部ではあってもそれを求めることは自然であり、花嫁に与えられている喜びなのです。その喜びを日々、豊かに経験することで、花婿を待ち望む思いはより増してくるのです。

●キリストの花嫁は、「傷なき者として」花婿の前に立つのでなければなりません。なぜなら、エバがアダムから造られたように、花嫁は花婿から出た(造られた)者だからです。花嫁は花婿のきよさと美しさの反映でなければなりません。これが「一体である」ことの奥義と言えます。その視点からキリストの贖罪を考える必要があります。もともと汚れに満ちた花嫁を、贖罪によってきよめて、ふさわしい花嫁にするというのではなく、神のご計画によれば、この世の基が置かれる前からキリストの花嫁はすでにキリストにあって選ばれ、傷のない美しい花嫁として造られたがゆえに、花嫁の贖いが必要とされたのです。そこに花嫁に対する花婿の犠牲的な愛があるのです。

●御父が、御子に永遠の愛を共にする結婚のパートナーを与えるために、御子を人としてこの世に遣わされました。この世での御子イエシュアの十字架の死は、私たちに對する「**驚くべき求愛行為**」でした。御子イエシュアの十字架の上で流された血潮(血の杯)を受け取った者はみな、花婿としてのイエシュアの求愛行為を自覚的に受け入れた花嫁であるべきです。それゆえ、教会で繰り返される聖餐の重要性はこの事実を想起することです。やがて迎えに来られる花婿に対する愛を再度確認すると同時に、いよいよ花婿を慕い求める花嫁となる決意を新たに生きた聖餐の時としなければなりません。聖餐は聖霊によって、まさに終末論的な希望の信仰を刷新するものでなければなりません。今日、この聖餐が「開かれた聖餐」と称して花嫁としての自覚のない者が陪餐にあずかることは、その本質を見失っているように私には見受けられるのです。これは、改めて検討しなければならない問題だと考えています。

●さて、パウロは宣教の働きを、「人々を清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげる」という感覚で考えていました。少なくとも、私は最近になるまで、教会が「キリストの花嫁」であるという明確な意識をもっていませんでした。もちろん、ことばとしては知っていましたが、念頭に置かれることはなかったのです。教会を「キリストの花嫁」として見る「ブライダル・パラダイム」は、「御国の福音」を考える上でも、また、キリストの再臨と終末に関する教えにおいても重要な概念であり、「終わりの日」に向かっているこれからの時代に必要なパラダイムだということを神の導きの中で確信したのです。

4. 「ブライダル・パラダイム」と「御国の福音」

●「ブライダル・パラダイム」は神のご計画全体と密接なかかわりがあります。それは、つまり、イエシュアの語った「御国の福音」と抵触するのです。

●「御国の福音」とは、神のマスタープランの成就であり、「神の恵みの福音」を包み込みながら、メシアの再臨によるメシア王国(千年王国)、そして最終ステージである天から降りてくる「新しいエルサレム」(黙示録 21～22 章)という永遠の御国の福音です。

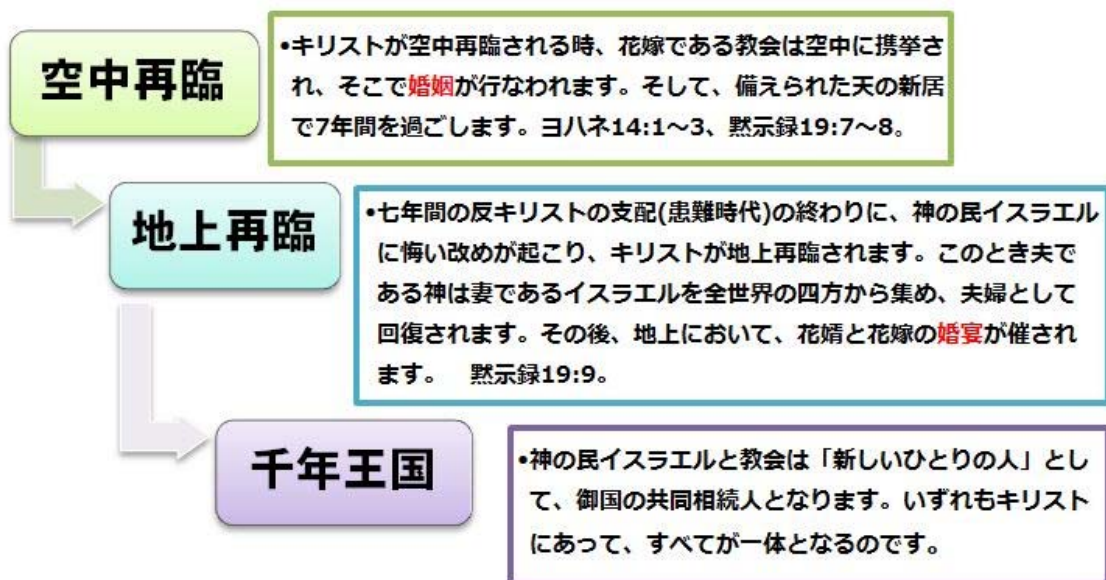
●「御国の福音」とはまたイエシュアの十字架の死と復活に基づく「神の恵みの福音」(和解の福音)を包み込みながら、聖書全体(初めから終わりまで)を貫く神のヴィジョンの成就によってもたらされる福音とも言えます。使徒パウロがこの「御国の福音」を教会(=キリストの花嫁)に対して余すところなく語ったとすれば、私たちもそのことを語らなければなりません。この「御国の福音」というのは、語れば語るほど希望が湧いてくるという不思議な福音なのです。「ブライダル・パラダイム」は、神のヴィジョンが成就・完成する方向を絶えず見据えさせる、力ある鍵です。主の祈りにあるように、この地に「御国を来たらせたまえ」と切に願わせる鍵となります。まさに、最初に述べたように、「ブライダル・パラダイム」はきわめて夢のある終末的・未来志向をもった教会を建て上げる鍵であると信じます。

5. キリストの花嫁である教会とイスラエルとの関係

●御国の福音を考えるとときに混乱するのが、教会とイスラエルの関係です。このことについて一言、簡単に触れておきたいと思います。

●イスラエルの民がエジプトを脱出したあと、シナイ山で神と合意の上で夫婦としての契約を結びます(出エジプト 19 章)。**教会はイエシュアをメシアと信じるユダヤ人信者と異邦人信者の共同体**です。イスラエルの民とは別個の共同体です。イスラエルの共同体に対する祝福とその務めは旧約で明らかにされていますが、「教会」の存在とその務めは、神のご計画の中では天と地の基が置かれる前からすでに存在していましたが、新約の時代になってはじめて啓示された奥義なのです。使徒パウロはその啓示を最初に受け取った人でした。教会は、決して一部の人が言うように「霊的イスラエル」(聖書にはそのような表現はありません)ではありません。

●イスラエルの全家がイエシュアをメシアとして信じるようになるのは将来のことです。それは、メシアが地上に再臨される直前です。そのとき、反キリストによって追い詰められたイスラエルの全家が「恵みと哀願の霊」によって民族的に悔い改め、神に立ち返り、世界の四方から集められることが聖書に預言されているからです。そのとき、イスラエルは本来の美しさを取り戻すのです(ホセア 14:4～7)。さらに重要なことは、「その日、一主の御告げ—あなたはわたしを『私の夫』と呼び、もう、わたしを『私のバアル(=主人)』とは呼ばない。」(ホセア 2:16)とあるように、やがてイスラエルの民が神を「私の夫」と呼ぶようになることです。これは、神とイスラエルの関係が全く変わることを意味しています。なぜなら、その日には、イスラエルの民が主なる神を「主人」とは呼ばず、「夫」と呼ぶようになるからです。つまり、神の「しもべ」として主人に仕える者ではなく、愛する夫を喜ばせたいという思いを持った「妻」として、イスラエルが回復するからです。



●このようにして、地上再臨される王なるメシアであるイエシュアのもとで、「イスラエル」と「教会」はひとつとされるのです。これが神のご計画であり、メシア王国において実現する「御国の福音」の祝福です。

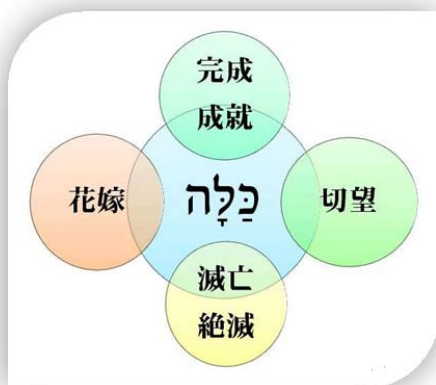
6. 「ブライダル・パラダイムの確立」を目指す取り組みとして

●今年の秋(9/27～10/4)に、空知太栄光キリスト教会で「セブレイト・スッコート」(「スッコート」とは仮庵の複数形です)の祝祭が初めてもたれます。祝祭と言っても集まる人はおそらくわずかでしょう。しかし神がそうするようにと導かれたので、従わざるを得ません。この祝祭の基調となる概念は「花嫁の霊性」であり、「ブライダル・パラダイムの確立」を目指す取り組みです。テーマ曲は「キリストの花嫁」で、歌詞は以下の通りです。右図の花嫁のピクチャーと同様に、この歌の歌詞も瞑想のテキストとなります。この歌詞はキリストの花嫁の姿を実に端的に表わしていると私は思います。

私の愛する方 何と美しく慕わしい
 この身も この心も すべてあなたのもの
 花嫁は待っています 花婿が来られるのを
 いつの日か顔と顔を合わせ みそばに行く日まで
 あなたを愛しています あなたのすべてが愛(いと)しい
 心尽くし 御霊も花嫁も待ち望む
 来てください 来てください 花婿イエシュアよ

ベアハリート

●「花嫁」のことをヘブル語では「カッター」(כַּלָּה)と言います。図を見ても分かるように、「カッター」は「花嫁」という意味だけでなく、「切望」「完成・成就」、そして「滅亡・絶滅」という意味があるのです。このように、一つの語彙に両義性があるのがヘブル語の特徴です。それは、神のご計画には「救い」と「さばき」が内包されているからです。



●花嫁の存在は、花婿を切望することによって、花婿が支配する御国を完成させ、成就させる「ふさわしい助け手」なのです。しかしその完成の暁には、神のご計画に従わなかった者たちには「滅亡」が余儀なくされるのです。それゆえ花嫁は花婿を尋ね求めることを通して、より成熟した花嫁へと成長して花婿の栄光を証し、そのすばらしさを見て神に立ち返る者たちが起こされるよう祈らなければならないのではないのでしょうか。

国内宣教委員会
「霊性の回復セミナー」担当
銘形 秀則